

パイプオルガン物語

清水一郎さん(S48年入社・幹事)

三越本店の“お宝”のひとつにパイプオルガンがあります。1929年アメリカのウーリッツァー社製で、1930年(昭和5年)に輸入され最初は7階催事場に設置されました。その後増改築完成と同時に2階の現在の位置に移動しました。

先日、このパイプオルガンに関して若い女性のお客様が感動的で心温まる文章を投稿されていたのを目にしました。我々も知らないことが散りばめられていると同時にパイプオルガンに留まらず百貨店文化についても鋭い考察をされています。今回ご本人の承諾を得ることができましたのでその全文をご紹介します。

東京大空襲をくぐりぬけたパイプオルガン

天女像の裏の2階バルコニーには、年季の入ったパイプオルガンが設置されている。パイプオルガンは昭和5年(1930)に購入された米国製のもので、その後昭和10年(1935)の本館全館完成時に現在のバルコニーに移されたという。

また、当時その音色はJOAK(NHKの前身)の電波で発信されていたという。それを見た私は、東京大空襲(1945)の戦火の中をくぐり抜けたオルガンなのだ、と思い調べてみると、理学博士の佐治晴夫氏が、婦人公論.jpに掲載されていたインタビューの中で、このオルガンと戦争の思い出を語っていた。佐治氏は、自身の戦時中の体験として、1942年の初めての東京での空襲の後、父が、東京もじきに戦火が広がるであろうこと、そして、今のうちに日本橋三越のパイプオルガンを聴いておくように、と息子たちに告げたと述べている。父は、学校を休んでもいい、とまで言ったそうだ。佐治少年が兄と三越に足を運んだ時パイプオルガンを演奏していたのは、軍服を着た兵隊だった。オルガンからは軍歌が流れていたが、最後に聴いたバッハの曲のことを佐治氏はよく覚えており、自身が芸術に興味を持つきっかけになったと振り返っている。

三越のオルガンは皆のものであり、そこにたしかに存在した文化の象徴だった。そして、戦火の中を生き残って今日まで奏でられているのである。

今なお中央ホールで奏でられるオルガンで聴くQUEENの名曲たち

さて、以上のことは私が帰宅してから調べたことだが、そんなことは全く知りもせず、天女像とパイプオルガンの存在だけ知っていた私は、それを味わいに三越に行くというのも、なかなか粋だろうと思って、一昨日は珍しく日本橋に遊びに行ったのだった。目的は、催事の英国展に合わせてパイプオルガンで奏でられるQUEENの楽曲の演奏だった。



パイプオルガン物語

オルガンの音で、「I Was Born To Love You」が聞きたかった。私は特段忙しいわけではないのにいつも心が何かを追われていて、自分の純粋な興味のために出かけることを知らなかった。だから、この日は、三越のご好意に甘えて、連れ出してもらったのだ。

演奏の時間の10分前になるとバルコニーに説明の担当の方が出てきて、オルガンや天女像の歴史、三越本館の建築についての話をはじめ。1階には、天女像とオルガンについての資料を配る従業員の方がいて、2階の方が演奏している人と目線が見やすいですよ、どうぞ、と誘導してくれる。直接的な売り上げには関係のない催しだが、そういうものが残っていることにうれしくなる。

三越で、どれほどの買い物ができる人かどうかも、まったくできない人かも、関係ない。天女像の拝観と演奏の拝聴は全ての人に開かれているし、誰でも資料を配ってもらえて歓迎される。ずっと続いていた文化活動なのだ。

クラシックの名曲もちろん素晴らしいが、あのオルガンでQUEENが聞けるのも面白い。

マイクスタンドを抱えながら激しく歌うフレディと、荘厳なパイプオルガンの組み合わせ。

もちろん「Bohemian Rhapsody」とはマッチする。柔らかで優しい「I Was Born To Love You」もよかったし、天女像をバックに聞く「We Are The Champions」は不思議な魅力に満ちていた。そして最後は、QUEENではないが、エドワード・エルガーの「威風堂々」。クラシックを1曲加えた、ということだろうが、迫力ある選曲がQUEENによく合っていた。

演奏中の動画撮影は禁止なのだが、それがまた「今ここ」の時間に集中させてくれるのだった。素晴らしかった。15分ほどの演奏だったが、何もなければ家に籠ったままの1日だったけど、おめかしして日曜日に百貨店にこられた。大満足だ。そして、今日自分が味わったものが、どんな人にも開かれているもので、そうした文化的な余地が今この時代に残されていることがたまらなくありがたいと思うのだった。

これからも紡がれ続けてほしい百貨店の文化

帰宅後にオルガンが、戦火によって「失われるかもしれない」とまで言われていたことを知り、今日まであのホールでの文化をを紡いできてくれた人に想いを馳せる。先に述べた佐治氏は、戦時中にあの音色を聞いてから半世紀後になんとあのオルガンを弾く機会に恵まれたのだという。佐治氏は「オルガンも、僕も生き延びた。夢のような時間でした。」と語っている。



昭和10年全館落成のポスター

パイプオルガン物語

軍歌を奏でたオルガンで、私はQUEENを聞いている。その時代の色を反映させながら、それでも、オルガンの音は90年の時間の中で奏でられ続けている。そしてあの華やかな天女像は堂々と佇み続けている。文化はただただ紡がれている。

社会に大きな役割を果たしながら営業が行われている商業施設が、これからも力強く息を吐いて欲しいと思う。願わくば、もっと増えて欲しいと思う。普段は催事に行ったりもしないのだけど、せっかく演奏を聴いたのだから、と、立ち寄った英国展で買ったスコーンを食べ、祖母に送るために買った紅茶を眺め、ムエットに纏わせてもらったパルファムの残り香を嗅ぎつつ、また近いうちに日本橋に出かけようと思った。

ミヤジ サイカ

激動の90年を生き抜き今なおその音色を多くの人々に届けているこのパイプオルガンにも様々な物語があることをサイカさんに教えてもらいました。

また、その後修復が必要となったこのオルガンを献身的にメンテナンスしていただいたのが日本大学で教鞭をとられていたビクター・C・セアル先生でした。当時は月曜定休で定休日のたびに一人でオルガンと格闘しておられる姿を何度か目にしました。

様々な方々のお陰で今日まで三越の“お宝”として存在しているのです。

奇しくも来年(2023年)は三越創業350年、もう一度色々な三越のお宝の魅力を再発見したいと思っています

三越のパイプオルガン

- ・中央区民有形文化財 平成21年4月1日登録
- ・1929年(S4)アメリカ:ウーリッツァー社製のシアターオルガン
- ・1930年(S5)輸入時は7階催事場に設置
- ・1935年(S10)日本橋三越本店増築完成に伴い2階の現在の位置に移動
- ・シアターオルガンとは、無声映画や商業演劇の伴奏用でその性質から管楽器、打楽器、さらには擬音(鳥のさえずり、汽笛音など)まで備えられた多機能、多彩な演奏が可能な楽器
- ・演奏台の他、実際には左右の部屋に852本のパイプと複数の打楽器などが設置されている
- ・演奏台には3段各61の手鍵盤と32鍵の足鍵盤(ペダル)、89個のストップレバー(音栓)が備わっている

(中央区広報紙コラム「区内の文化財」より)



パイプオルガン物語



昭和10年頃の三越本店

創立50周年記念誌「三越のあゆみ」より

852本のパイプの一部

パイプオルガンって？



- 風をパイプに送り空気を振動させて音を出す楽器
- 風箱(かざばこ)と言う穴の開いた箱の上にパイプを立てて鳴らしたいパイプに下から風を送る



風箱

- 何百本ものパイプが必要なのはパイプは一本でひとつの音しか出せないから。
- ある音色を低い音から高い音まで56鍵分出したければ56本のパイプが必要となる。
- どのパイプを鳴らすかは、ストップレバーと鍵盤を用いて選ぶ。
- 鍵盤はドレミ等どの音にするかというスイッチの役割で、ストップレバーによって希望の音色のスライダー(穴の開いた板)が動き、例えばドの鍵盤を押すとどの風路に空気が入り選んだ音色のパイプを通して音が鳴る。
- 例えばトランペットとフルートのストップレバーを引くとひとつの鍵盤を押すだけで2つの音色を同時に引き出すことができる。

(YAMAHAのHPより)